

林忠正コレクションと パウラ・モーダーゾーン＝ベッカー

佐藤 洋子

キーワード

林コレクション、女性画家パウラ・モーダーゾーン＝ベッカー、
売り立て目録、浮世絵の触発、絵画表現への影響

0. はじめに

この論文では、19世紀末から20世紀初頭にかけて、パリを本拠に、日本の造型芸術をヨーロッパに紹介した画商林忠正のコレクション作品と、そこから新しい美術表現の着想を得て、ドイツ表現主義の先駆けとなる画業を展開した女性画家パウラ・モーダーゾーン＝ベッカーの取り組みを追究するのが目的である。

林忠正は、1902年と1903年の2回にわたって、美術商会閉店に伴う売り立てをおこなった。1903年2月、2回目の絵画修業のため、パリにやってきた女性画家は、詩人ライナー・マリア・リルケの招待で、ともにこの売り立ての一般公開を見た。日本のとくに色刷り木版画の絵画技法に接した強い印象を、彼女は「その偉大な不思議さが、わたしを包んでいる」と、興奮をもってその夜の日記に記している。

女性画家と詩人は、何を見たのだろうか。

林コレクションの売り立て目録は、大部の3巻本として遺されている。当時パリで秘蔵されていた日本の美術品のうち、とくに浮世絵は、江戸末期までの著名な作者を網羅している。このカタログを基礎的な文献資料とし、そこに載せられた写真図版と、そこから造型上の刺激を受けた女性画家の作品を比較対照することにより、日本文化の独特の表現様式に向けられたまなざしの多様性

を明らかにしたい。

19世紀後半に、浮世絵版画がヨーロッパのジャポニスム形成に大きな役割を果たし、印象派の画家に多大の影響を与えたことは知られているが、女性画家パウラ（以下、この名で表記）は、20世紀の新しい芸術潮流、人間の内面の表出をめざすヒントを浮世絵の世界のなかに読み取り、自らの絵画作品構築の一つの手がかりとした。詩人リルケ（以下、この表記）は、とくに北斎の描写に触発され、世界でもっとも短い詩といわれる俳句に言語芸術としての興味を抱きつつ、一連の富士風景を、連なる山並みを思わせる詩の調べにのせた。ふたりの芸術家の生きた時代の造型芸術のなかで、日本の浮世絵版画は、表現に携わる者の新たな視点で、異なる文化の生命と可能性が掘り起こされたといえよう。

1-1 林忠正

林忠正となる人物は、幕末の1853年11月、加賀前田藩の越中高岡（現富山県高岡市）で、蘭方外科医、長崎言定の次男として生まれている。祖父の浩齋も、江戸の大槻玄沢のもとで学んだ蘭学医であった。この年、開国を求めてアメリカのペリー提督が来航、鎖国日本をめぐる情勢は、国内外ともに激動の時期を迎えることとなる。

明治維新前年の1867年、パリ万国博覧会に日本は初参加した。薩摩藩との共同展示であった。この時、日本美術愛好家フィリップ・ピュルティが、浮世絵画帳を展示した。万博を介しての日本文化紹介は、すでに1862年ロンドンで、当時の駐日大使サー・オールコックの収集品を中心に、非公式ながらかなりの規模でおこなわれていた。

1870（明治3）年、忠正は富山藩大参事、林太仲の養嗣子となり上京、村上英俊のフランス語塾に入り、翌年、藩から選ばれた学生として、「大学南校」に入学する。

1873（明治6）年には、学制改革で「開成学校」に移るが、ヨーロッパではこの年のウィーン万博で、日本美術が高い関心を集めた。これに設立されたばかりの「起立工商会」が参加し、林の美術商としての活躍の伏線が敷かれた。

1878（明治11）年、23歳の林は起立工会社員として、憧れのパリへ渡航。折

からの第3回パリ万博の通訳を務め、革新派の芸術家やゴンクールとの親交が始まる。これからの林は、ヨーロッパの日本美術愛好ブームに応え、日欧文化の架け橋としての活動に心血を注ぐこととなる。1884（明治17）年、「日本美術の情報の店、若井・林商会」を開店し、当時成功を収めていたドイツ人美術商ピングと覇を競っていく。日本人林はその精通した知識により、ヨーロッパ各地の美術館から、日本美術の鑑定整理を依頼されただけでなく、フランス人の著述にも懇切な協力を惜しまなかった。1883年、ルイ・ゴンスの『日本美術』、ゴンクールの、1891年『歌麿』と1896年『北斎』の出版は、実質的な林の助力によって成ったものだった。時代は印象派が新たな色彩の饗宴を展開していた。黒田清輝は林の紹介でコラン塾で学び、日本に外光派の新風をもたらした。

1-2 1900年パリ万国博覧会

林忠正のヨーロッパに根をおろした活躍は、日本の高官、有栖川宮、西園寺公望、伊藤博文らの評価するところとなった。万博の意義を重視する林の「意見書」は採択されて、林は事務官長に抜擢された。日本社会には反感があったが、余人をもって代えがたく、第5回パリ万博は、出品参加数8万3千、観客動員数5千万を超える史上最大の規模となった。日本館では、10世紀にわたる国宝級の800点を展示した「日本古美術展」が成功を収めた。会場内の「アール・ヌーヴォー・ピング館」は、時流に乗って大反響を呼んだ。

林忠正は日本出展の功績により、「教育文化功労章1級」「レジオン・ドヌール勲章3級」を受賞した。世紀転換期にあって、日本は美術による地歩を築いたのだった。

2-1 パウラ・モーダーゾーン＝ベッカー

表現主義の先駆けとなる画業を打ち立てた女性画家パウラ・ベッカーは、1876年2月8日、エルベのフィレンツェといわれた文化都市ドレスデンで生まれた。父ヴォーデマーは、祖父がオデッサ大学学長をつとめたロシアで生まれ、ドイツ移民社会のなかでゲーテ時代の教養を身につけ、故国にもどって当時最先端の鉄道技術者となった。母のマティルデは、チューリングゲン・ザクセ

ン貴族の出身だった。パウラは、7人兄弟姉妹の3番目の子として、父からは目標に向かう進取の気性と、母からは明るくゆたかな情感を受け継ぎ、新興帝国5年目を迎えた時代の空気のなかで成長していった。

1888年、父の鉄道監察官の異動で、一家は北のハンザ自由都市ブレーメンに移住、16歳になった1892年に、ロンドンの伯母のもとで半年間、英語と家政を学ぶという体験をしている。このときにはじめての絵画の勉強が、人生の中心に据えられていく。

父は娘の将来のために、女教師養成学校に通わせたが、絵画勉学の続行は拒否しなかった。19世紀末の社会状況では、女性の専門教育の道は十分ではなかったが、パウラは親戚の経済的援助を得て、ベルリン女性芸術家協会の養成学校に通うことができた。

この頃ブレーメン郊外のヴォルプスヴェーデには、5人の画家が移住して芸術家村をつくっていた。バルビゾン派に共鳴して、自然環境のなかで芸術制作をおこなっていたリーダー格の画家マッケンゼンのもとで、パウラは本格的な絵画修業に励むこととなる。

1899年末、パウラは岐路に立たされた。友人と共同展示した数枚の作品を、保守的な批評家から酷評され、精神的打撃とともに、自分の進む道を求めてパリへ旅立つ。

2-2 1900年パリ滞在と人生の転機

1900年、年明けのパリは、万博の開幕を控え、近代産業と市民生活の成熟した大都会だった。文芸の中心地として、新しい潮流の高揚期にもあった。まさに花の都だった。

パウラはコラロッシ画学校で、世界中の画学生たちと学び、一足先に来ていた彫刻家を志す親友クララ・ヴェストホフとともに、自立を目指し、活力にあふれた生活を送った。造型芸術の宝庫である美術館めぐりに情熱を燃やし、画商の店で発見した、当時はまだ注目されていなかったセザンヌの絵に、「雷のような衝撃」を受ける。

半年間のパリ滞を終えたパウラは、農家ブリュンエスにアトリエを借り、ここが終生の制作の場となる。この夏は、ヴォルプスヴェーデの若い造型作家

ハインリヒ・フォーゲラーの館に、作家カール・ハウプトマンと、詩人リルケが招かれていた。その文化サロンから、はつらつとした青春の交流と、人間の結びつきが生まれた。

風景画家オットー・モーダーゾーンは妻を病気で失い、幼女をかかえていたが、若々しい絵画的感性をもつパウラと、心の通じ合いを経て婚約、1901年5月に結婚をした。詩人リルケとクララも結婚、ふたりは更なる勉学のために、ふたたびパリへ赴く。

3-1 1903年2月、林コレクション売り立て

女性画家パウラは、マッケンゼンの指導の下で、ヴォルプスヴェーデの農民の肖像デッサンに、すぐれた観察力と力強い造型力を見せている。フォーゲラーから手ほどきを得た銅版画にも、メールヘンの雰囲気たどる独自の世界をつくり出している。婚約のときと結婚当初は、夫モーダーゾーンと同じ対象を描き合い、目ざましい進境を見せていた。ヴォルプスヴェーデの風景の情調を表現しようとしていたパウラは、次第に目を転じ、詩人リルケとの語らいのなかから、身近にあるものへの観察を深め、《青と白の磁器とケトルの静物》で初期の静物画の到達点に達している。また継娘に注ぐ愛情は、《庭のエルスベット》となって、その後、数多くの子ども像への導入的作品となった。

自分自身の絵画世界の確立を目指していたパウラは、文芸の中心地パリの洗礼を受けた後では、ヴォルプスヴェーデの保守性に限界を感じていた。20世紀初頭、造型芸術の殿堂パリへの思いは抑えがたく、1903年2月、2回目の絵画修業に旅立つ。

詩人リルケ夫妻は、結婚後生まれた娘をクララの実家に預けて、パリで暮らしていた。彫刻家ロダンのもとでクララは勉学を続け、リルケはこの巨人の伝記執筆のかたわら秘書を勤め、ヨーロッパ近代文化の爛熟期にあって、さまざまな文芸情報にも恵まれていた。

そのうちのひとつが、林忠正コレクションの売り立てであった。1903年2月15日の一般公開展示初日に、リルケ夫妻はパリに来て5日目のパウラを招待したのだった。

3-2 第2回林コレクション売り立ての観覧

詩人リルケは、生涯を通じて、その時代の造型芸術と深くかかわった。ヴォルプスヴェーデの画家たちの『風景絵画論』に始まり、彫刻家ロダン、やがてピカソからバルテュスに至るまで、詩作する魂に呼応する造型芸術の把握は、つねに彼の生の中心にあった。

当時のジャポニズムの現象が、異国趣味の領域を脱するためには、総合的な日本美術像の提供が不可欠であり、林コレクションはその未開拓の分野に光りを当てるものだった。この頃有名な画商であり東洋美術の解説者であったサミュエル・ピングは、この林コレクションのカタログ序文で、「まだ十分に解明されていない領域の細部を照らそうという、不屈の熱意を兼ね備えた人物がなし得た仕事」と紹介している。

1903年2月15日、午後2時から5時まで、オテル・ドルオーで開かれた売り立て展示会のなかで、女性画家パウラの観察眼に残ったのは、いわゆる浮世絵の数々だった。その夜の日記には、さめやらぬ興奮の内容が、こう書き記された。

「夜の表現、恐ろしいもの、愛らしいもの、女性的なもの、コケティッシュなもの表現、これらすべてが、わたしたちがなし得るよりずっと素朴で、ずっと的確な方法で解決されている。主題に重点が置かれているのだ！！」

これらは、日本美術のなかに発見した、「偉大な不思議さ」の新しい表現であった。

4-1 林忠正コレクションの売り立て

林忠正がパリ万博事務官長に専念していた間、パリの日本美術の店は末弟にあたる萩原正倫にまかされていた。「日本古美術展」成功を受けて、林は万博終了後、「1900年万国博覧会における日本」や「日本美術」の講演を行っている。翌年4月、帰国中の林のもとに弟肺結核の電報が届き、1902年1月に萩原正倫は34歳でパリに客死した。

後継者を失った店は、売り立てを余儀なくされた。20余年の画商活動で収集した日本を中心とする東洋美術品の総計数千点に及ぶ内訳は、万博の古美術展

に出品された仏像、能面等の木彫品、天平時代からの漆器類、中国・朝鮮・ルソン製を含む陶磁器、中国唐代の青銅花瓶や日本中世の鑄造仏像等であった。売り立ては、下記都合3回行われた。

第1回売り立てA（日本・東洋美術の部）

特別展示 1902年1月13日から18日まで。ピングの店。

一般公開展示 1月24、25日。デュラン・リュエルの店。

第1回売り立てB（日本絵画の部）

特別展示 1902年5月23日から28日まで。ピングの店。

5月31日。オテル・ドルオー、7 & 8室。

一般公開展示 6月1日。2～6時。オテル・ドルオー。

第2回売り立て（日本・東洋美術の部）

特別展示 1903年2月5日から10日まで。ピングの店。

2月14日。オテル・ドルオー。

一般公開展示 2月15日。2～5時。オテル・ドルオー。

上記の競売は、一般公開展示後の1週間前後、第1回Aはデュラン・リュエルの店、第1回Bと第2回はオテル・ドルオーで行われた。いずれも鑑定人はS. ピング、競売史はP. シュバリエであった。

4-2 林コレクション売り立て目録3巻

林コレクション売り立て目録は、3巻の分厚いカタログとなっているが、それは日本・東洋美術の歴史的体系を概観できる内容で、とくに第1巻は、浮世絵作家作品の全貌を知ることのできる貴重なものである。表紙は、磯田湖龍齋の《吉原の女》の一部がカラー石版で、見開きには北斎の《名橋奇覧》の実物大カラー石版が載せられている。浮世絵版画（エスタンプ）の1206枚、肉筆画（デッサン）の153点、絵入り版本（リープル）が載せられている。これらは春信17枚、写楽24枚、清長77枚、歌麿132枚、北斎106枚、広重65枚を含む豪華図録である。絵入り版本は、師宣30冊、春信17冊、春章6冊などの521冊で、総計1880点余の浮世絵大観、といった趣がある。第2巻は、日本・東洋美術全般、第3巻は、日本・中国絵画、工芸品を中心としている。

4-3 林コレクション売り立て目録の史的意義

林コレクション売り立て目録3巻は、明治期海外に流出し、その後散逸した浮世絵や古美術等の内容を迎える手がかりを与えてくれる。それは同時に、ヨーロッパ人の目に映じた日本の美意識の価値と新鮮な造型表現を認識するだけでなく、外からの視点がもたらした「日本的なるもの」の逆輸入という、日欧文化の相互影響の問題を投げ掛けてくる。

作家永井荷風は、1903（明治36）年9月、渡米して銀行員の勤務を続けるうち、「胸中に漸く芸術上の革命起れるを覚」え、5年後ニューヨークからフランスに渡る。当時の心境は、1917（大正6）年の『斷腸亭雜稿』で、こう追憶されている。

「思へば千九百七八年の頃なり。われ多年の宿望を遂げ得て初めて巴里を見し時は明るく日を待たずとも更に怨む處なしと思ひき。泰西諸詩星の呼吸する同じき都の空気をばわれも吸ふなり。同じき街の敷石をば響も同じくわれも今は踏むなり。……われはヴェルレエヌの如くにカフエーの盃をあげレニエーの如くに古城を歩み、ドーデの如くにセーヌの水を眺め、コッペエの如くに舞踏場に入り、ゴーチエーの如くに畫廊を徘徊しミュッセの如くに屢々泣きけり。かくてわれは世に最も幸福なる詩人となりぬ。如何となればわれは崇め祭るべき偶像あまた持つ事を得たればなり。十七世紀以降二十世紀に至る佛蘭西文藝史上に其名を掲げられしものは悉くわが神なり。」
全身全霊でヨーロッパ文化に対峙した後、故国に戻った作家の視野は拡大していた。

「今や世を擧げて西洋模倣の粗悪なる毒毒しき色彩衣服に書籍に家屋に器具に到處人の目を脅すにつけて、僅兩三年前まではさほど思はざりける風土固有の温和なる色調、漸く其のなつかしさを増し行かんす。気早の人衆に我等を以て好古癖に捉はるるものとなす莫れ。我等眞に良きものなれば何ぞ時の今古と國の東西を云々するの暇あらんや。西班牙に固有の橙紅色あり。佛蘭西に固有の銀鼠色あり。伊太利亞に固有の紅色あり。是旅行者の一度其の國土に入るや天然と藝術との別なく漫然として而も明瞭に認むる所なり。一國の風土は天然と人爲とを包含して必ずここに固有の色を作らしむ。我等は我邦土本來の面目の何たるかを知り之を失はざらん事を慮るに過ぎず。お

のれの面目を知るは是即ち進んで他の面目の何たるかを窺ふの道たればなり。」

「他者を知る」視点から、作家は「日本回帰」と比較文化の場を、浮世絵のなかに見出した。「三田文学」には、相次ぎ『鈴木春信の錦絵』『泰西人の見たる葛飾北斎』『ゴンクールの歌麿及北斎傳』『欧米人の浮世絵研究』『衰退期の浮世絵』等が発表された。

永井荷風は、ゴンクールの美術観に決定的な印象を与えた浮世絵作家の伝記のなかで、「1902年巴里に於て林忠正はその所蔵の浮世絵並に古美術を競売に付するに際し浩翰なる写真目録を出版せり。此書今に到るも猶研究者必須の参考書たり」と述べている。

渡米した翌1904年に日露戦争の報に接し、その後ヨーロッパをまわった永井の意識のなかには、つねに「世界」と「日本」の構図が存在していた。江戸日本の生んだ美術の普遍性と特殊性から、世界の文化それぞれの「色」と「面目」の多様性を指摘したのだった。

5-1 詩人リルケの見た北斎

詩人リルケには、「山」と題する詩がある。1908年刊行の『新詩集 別巻』に収められている。Gwakiojinn Hok'sai (画狂人北斎)の造型意欲に感動した詩作である。

三十六たびも 百たびも
絵師は かの山を描きぬ。
遠ざけられては また ひかれつつ、
(三十六たびも 百たびも。)

かの 不可思議の 火の山へ
幸にみち 期待にわななき すべも知らずに
されど 輪郭のあたえられしもの、
かの山の 壮麗をとどむるによしもなかりき。

日に 千たびも浮びいで、
夜もまた かぎになく棄てはつ。
なべて みなものたらざること、
瞬時に すべての形像をうち消して

形より形へとのぼりゆく。
無関心に ひろく また 考えもなく
突如 はたと悟りて その姿 神の顕現のごと
ありとある光のかげに聳ゆなり。 (星野慎一訳)

これは、北斎の《富嶽三十六景》《富嶽百景》を熟視しなければ書けない詩であることはいうまでもない。リルケは、同郷プラハ出身の画家で、日本に木版刷りの技法を学びに行った親友エミール・オルリクから、世界で最も短い詩の形式について聞かされていた。この「山」には、俳句風の調べを試みた詩人の、北斎にならった形への意欲が窺える。

リルケのこの詩は、1904年デュッセルドルフの日本美術収集家ゲオルク・エーデル (Georg Oeder) の好意によって、《三十六景》《百景》双方を観察した後に成立し、刊行の1908年には、前年に夭折した女性画家パウラへの長文の『鎮魂歌』も詠まれている。

林コレクション売り立て目録第3巻(1903年)には、北斎漫画 XII, XIII, XIV の他はリーブルの Fougakou Hiak'kei 《富嶽百景》と肉筆デッサンが載せられているだけである。1903年の売り立てに、《三十六景》は展示されていなかったのだろうか。詩人の脳裏に、北斎の印象が、22×15cmの絵入り版本だけで刻まれたとは想像しにくいのである。

5-2 1903年売り立て展示品と林コレクション目録第3巻

1903年2月15日に、詩人リルケと女性画家パウラが見た林コレクションの一般公開展示品は、1903年と銘打たれた目録第3巻の内容物だけだったのだろうか。

第3巻は日本・東洋の美術工芸品が中心となっている。全作品1743点の内訳

は、パリ万博に出品された十一面観音像、阿弥陀像、弥勒菩薩像、毘沙門天像などの彫刻と能面の49点、11世紀から19世紀までの、小阿弥、光琳などの漆器類249点、印籠・櫛のあわせて209点、日本・中国・朝鮮の陶磁器489点、青銅製品・鏝などの金属製品169点、その他喫煙具・根付などの252点、パリ万博出品縫画仏像《日天月天》1点となっている。絵画325点は、光琳の《寒山拾得》の他、土佐派、狩野派、独立派の作品があるが、浮世絵208点は、北斎肉筆の女性像以外は、大半がリーブルである。

女性画家の展示品への関心は、工芸品ではなく、絵画の、とくに斬新な表現力で目を引いた浮世絵であったことは、感嘆符を二つ (!!) 打った日記からも明らかである。その記述に、リルケが北斎に注目したような、作家の固有名詞は見られないが、西洋絵画より「ずっと素朴で的確な方法」とみた技法から、色刷り木版の絵画世界が見てとれる。また「主題に重点が置かれているのだ」という発見は、同じ絵画作家として、テーマのとらえ方とその表現形式におどろき、覚醒させられる視覚体験であったことを物語っている。

この強い印象記は、コレクション目録第3巻からは浮かび上がってこないのである。

とすれば、公開展示当日には、他の浮世絵作品があったのではなかろうか？

5-3 林コレクションの展示、目録、買い取り先

パウラ・モーダーゾーン＝ベッカー財団は、女性画家の遺児ティレ・モーダーゾーンによって、1978年にプレーメンに設立され、多くの関係資料を収集していた。その中に林コレクションの図版のない第3巻目録が所蔵され、その内容は解明の手がつけられないままであった。

1903年2月15日の売り立て展示会で、女性画家パウラと詩人リルケの見た浮世絵は、林コレクション目録第1巻のものとは一致する、というのがわたくしの仮説であった。このカタログに掲載されている名品には、薄葉紙で保護された写真が付されており、目録ナンバー及び作者・題名・形状・解説と詳細に付け合わせていくと、実物像が得られる。それは、浮世絵の通史を知り、代表的作家列伝といえる作品の収録カタログで、永井荷風のいう「必須の参考書」の姿を見せてくる。しかし目録の年代に固執すれば、1902年売り立ての品物が、翌

年に持ち越されるには、納得のいく検証が必要となる。

林コレクションの、2回にわたる売り立ては、傑作類の高値で美術館・愛好家ともに手が出ず、多くは1903年に、フライブルクのグロッセ博士が購入した。複数生産の版画である浮世絵が、2回目の売り立てにも展示されていた可能性は否定できないだろうとの証言は、グロッセ博士がコレクションを寄贈したベルリン東洋美術館及び林忠正の義孫で作家の木々康子氏他からも得た。

売り立て会場だったオテル・ドルオーは、パリ・オスマン大通りとラファイエット通りにはさまれた、今も古美術商街の角地にある。そこからピング、林の店は徒歩5分足らずの至近距離であった。詩人と女性画家が、売り立て見学の前後に両店を覗いてみることも、十分想像できた。

5-4 「錦絵及画本売価入」とレイモン・ケ克蘭

林コレクション売り立て目録には、「錦絵及画本売価入」という付属小型のカタログが残されていた。木々氏宅で閲覧したその目録には、鉛筆で競売価格が記入されていた。

目録第1巻の写真にもある1000フラン以上の浮世絵版画は次の通りである。

懐月堂安知《おちゅう立姿》 長大判・墨刷筆彩色、1000フラン。

奥村政信 《お七と吉三》 紅刷絵、2200フラン。

《佐野川市松立姿》 紅刷絵、2000フラン。(ピング氏へ送る)

鈴木春信 《傘をさす黒頭巾の女》 1000フラン。

《雪中、相合い傘で歩く若い男女》 1100フラン。

《達磨大師》 1520フラン。

鳥居清長 《江戸駿河町遠景》 特大長判、1000フラン。

《桜の下の若い女たち》 1110フラン。

葛飾北斎 《富嶽三十六景》 横大錦判、2474フラン。

歌川広重 《木曾山中猿橋の夜景》 大掛物、2000フラン。

売り立ての最高額は、第1回Aの漆器類378点のうち、光琳の《三輪の硯箱》で、万博美術略史にも載っている林の愛蔵品だった。林忠正のもっとも親しい友人で日本美術の愛好家レイモン・ケ克蘭の傍聴記録によれば、これまでヨーロッパに現れたことのない美しい特選品には、2万5千フランの値がつ

き、そのとき「驚き、怯えたような静寂が競売の呼び掛けに応えた」という。

詩人リルケ、女性画家パウラともに日本美術の収集家ではないが、1902年に
行われた林コレクションの売り立ての評判は耳にしていたに違いない。日本の
庶民芸術家の創造になる浮世絵の評価は、印象派の画家たちに大きな影響を
与えるほど高かった。

一般の関心も高く、1888年5月から1891年4月まで刊行された『芸術の日本』(Le Japon Artistique)は、フランス語、英語、ドイツ語の3か国語で、
ヨーロッパの日本美術愛好者の期待に答えていた。毎号数多くの美しい浮世絵
で彩られた雑誌は、日本美術の専門的情報だけでなく、J. プリンクマン(詩
歌) A. ルクー(演劇) A. L. リバティー(産業美術)に至る識者の寄稿に
よって、日本文化そのものへの理解に貢献していた。この画期的な文芸雑誌の
編者兼精力的な執筆者は、S. ピングであった。

浮世絵に開眼するきっかけとなった展覧会についてケクランは次のように述
べている。彼は1890年、エコール・デ・ボザールのピング主催展に、期待せず
に出かけた。

「何という驚きだったろう。2時間にわたって私は、その鮮やかな色彩
に熱狂していた。花魁、母親の姿、風景、役者、すべてに見とれた。展覧
会で売られているカタログと参考書を鞆の中に詰めこみ、その夜私はむさ
ぼるように読んだ。」

13年後の1903年、浮世絵版画は、女性画家に同種の体験をさせたのだった。

6-1 女性画家パウラの見た浮世絵

1903年2月15日夜、女性画家の日記は、浮世絵世界から得た強い印象を、つ
ぎの5つの表現に要約している。その「夜の表現、恐ろしいもの、愛らしいも
の、女性的なもの、コケティッシュなものの表現」を、林コレクション第1
巻、エスタンプの写真図版とあわせて調べてみた結果、下記の作品を選び出す
ことができた。題名は作品表現による。

A. 夜の表現

Tchoki	長喜	925	《月夜の夕涼みをするふたりの女》
Toyohissa'	豊久	1035	《新吉原星月夜風景》

Hiroshighe 広重 1258 《木曾山中猿橋夜景》大掛物

Sadanobou 貞信 1354 《備後海岸月夜》

B．恐ろしいもの（この世にないものの表現として）

Shunyei 春英 602 《幽霊》(Un revenant)細絵

（第2巻にゴンクールもふれた妖怪《三つ目ろくろ首》1612がある）

C．愛らしいもの（保護すべき命をもつものの表現として）

Harunobou 春信 368 《釣り道具の母と子》政信と入れ違い

Koriusai 湖龍齋 448 《子どもとニワトリ》

Outamaro 歌麿 861 《赤子を高く抱きあげている母》

Hok'kei 北溪 1232 《二羽のニワトリ》刷り物

D．女らしいもの（女性の生活領域と思われていたものを含めて）

Kaighetsudo 懐月堂 189 《おちゅう立姿》長大判、墨刷筆彩色

Massanobou 政信 282 相合傘の《お七と吉三》紅刷絵

Harunobou 春信 387 《傘をさす黒頭巾と白衣装の女》

Outamaro 歌麿 797 《台所の女たち》2枚画

E．コケティッシュなもの（女性の裸体・媚態と映るもの）

Hok'sai 北斎 116 《髪を梳く女》デッサン

Harunobou 春信 391 《髪洗うふたりの女》

Kiyonaga 清長 689 《化粧する女に手紙をとりつぐ女》

Outamaro 歌麿 801 《婦女人相十品》

この他、「的確な方法」「主題の重点」と思われたものを、次に挙げる。

F．「手法」（大首絵といわれる顔の表現、人物絵、役者絵など）

Kiyohiro 鳥居清広 254 《笛を吹く男女》

Sharakou 東洲齋写楽742 《ふたりの役者、瘦顔と丸顔》手の表現

G．主題（日本の風土に根ざした生活風景図）

Toyokouni 歌川豊国 1077 《笥掘り風景》両画十二候五月、三枚続
北尾政美（恵斎）《魚（ひめじ）》『芸術の日本』中

6-2 パウラ・モーダーゾーン＝ベッカーの絵画における浮世絵の影響
造型作家にとって、他の芸術の影響を全く受けず制作をすることは不可能と

思われる。自分の芸術世界の確立のために、絶えず新たなものから養分を吸収し、独自の表現を模索し続けるのが、造型芸術に携わる者に課せられた務めといえるだろう。

女性画家パウラは、その10年間という短い制作期間に、一貫してひたむきな意欲で、700点余りの作品に取り組み、自らの絵画世界の表現を追求していった。1907年、31歳で夭折するまでに、1905年には3回目のパリ滞在2か月、翌1906年2月からは夫と別居のかたちで、4回目1年余りにわたるパリ滞在を重ねている。

20世紀初頭のパリは、芸術潮流の頂点にあって、絵画革新の風が巻き起こっていた。1905年のサロン・ドートンヌでは、「フォーヴ（野獣）」の強烈な色彩と造型の叫びが上った。同年ドレスデンでも、「ディ・ブリュッケ（橋）」が新世紀のドイツ表現主義の旗揚げをした。

女性画家パウラは、それらの動きとは孤立した制作を続けていたが、新たな芸術の風には敏感な「時代の子」だった。1900年1回目のパリ勉学のときから、セザンヌに注目し、回を重ねる度に、ルーヴルのエジプト美術、ナビ派への関心、ゴーギャンやドニとの絵画的かわりを深めていった。それらの総合的影響のひとつに、浮世絵版画があると思われる。

1903年のパリ滞在以降、女性画家パウラの世界は、一挙に拡大していった。その分野は、風景、子ども、母と子、自画像、肖像と、日記に記された印象のキーワードと一致する。画家は浮世絵から着想を得て、新鮮な表現の視点をもたらし、ヴォルプスヴェーデ・コスモスから大きく羽ばたいた記念碑的作品を生み出していったのである。

浮世絵世界の情調、その表現様式に影響を受けたと思われる作品を、女性画家の分類に則して以下に挙げる。

A．夜の表現：（五感を研ぎ澄まして見た自然・環境の受容。）

《夕暮れのヴォルプスヴェーデ》、《星月夜の農婦》（ゴッホの自画像背景にも同種の夜景が見られる。）

B．恐ろしいもの：（生命の限界、老年を深淵まで追求。）

《青い目の老女》《両腕を交差する老農婦》

- C．愛らしいもの：（子ども・生きとし生けるものへの愛情と関心。密接感の表現。）
 《ニワトリ》、《女の子とネコ》《盲目の姉妹》（ピカソに類似の表現。）
- D．女らしいもの：（母と子などの母性、台所の日常生活へのまなざし。）
 《全身自画像》《母と子》《サワーミルク・カボチャ・サカナ》等の静物画
- E．コケティッシュなもの：（裸像に見られる少女・女性題材の拡大。）
 《結婚記念日の自画像》《琥珀の首飾りの自画像》
- F．手法：（大首絵、役者絵から学んだ、焦点をあてて画面を区切る構図。）
 《赤子と母の手》《農婦1903》《ゾンバルト像》《リルケ像》《リー像》
- G．主題：（風土性から学びとり、触発されたテーマ。群像。）
 《森の少女とカウサギ》《森の中で笛を吹く少女》《カモ池際のドレーベン》

女性画家パウラは、浮世絵から得た「力強さと充実」を絵画表現に打ち立てた。主な触発を受けた浮世絵とパウラの作品を4点、並べて本稿末に掲げる。

7. おわりに

本稿の内容は、2002年9月末のEAJRS（ヨーロッパ日本資料専門家学会）パリ会議において発表した。スライドを2台用いて、林コレクションとパウラの作品を対比させながら、浮世絵の触発によって切り拓かれた女性画家の造型表現を比較考究した。

林コレクションの浮世絵は、掲載された図版によってその内容が確認される、といった制約があった。フランス語の目録と図版には、読み違いと見られる作者名の誤りもあり、東洲斎写楽の原題《中村和田右衛門のぼうだら長左衛門、中村此蔵の船宿かな川の権》は、《ふたりの役者、瘦顔と丸顔》と、説明題になっている。喜多川歌麿の母子像も同様に、《赤子を高く抱きあげている母》とされ、鳥居清広の《笛を吹く男女》の大判紅摺絵は、中国玄宗皇帝と楊貴妃の見立てであるが、それは触れられていない。

林コレクションの浮世絵寄贈先とされるベルリン東洋美術館には、現在約

7000点の浮世絵版画が所蔵されている。そのコレクション母体となったものは、ドイツ系ユダヤ人ジェームス・シモンが1904年に寄贈したものがもっとも古い。1906年の同館開館のために、グロッセ博士は初代館長クンメルとともに、ヴィルヘルム・ボーデの資金で中心となる日本美術品を買い付けに行ったが、それは林忠正が帰国した翌年であり、また病没の年でもあった。林の遺言により優先購入したものは、絵画・漆・焼き物類で、浮世絵は含まれていなかった。グロッセの林コレクション浮世絵は、1919年に寄贈された。1943年にはゲオルク・エーデルが寄贈したが、その中には林からの購入品もあった。

ベルリン東洋美術館の所蔵品は、『秘蔵浮世絵大観12』（講談社、1988年）のなかに示されているが、歌麿、北斎、広重、豊国等があり、写楽は8点となっている。林コレクションはすべて、ベルリンに入ったわけではなく、写楽の《ふたりの役者》は、ギメ美術館、清広の《玄宗・楊貴妃見立て》は、パリ国立図書館に〔林忠〕の印つきで所蔵されている。傑作浮世絵は分散している、という事実が調査から得られた。

以上の調査、比較提示から、これまでヨーロッパのパウラ研究において、没後1世紀近く未開拓であった浮世絵作品が明らかとなり、新たなアスペクトを開いたと思われる。

日本の浮世絵版画が、印象派の画家を刺激し、当時隆盛のジャポニスム現象とも相俟って、とくにマネ、ホイッスラーらの絵画世界を拡大したこと、ポスト印象派ゴッホには直接的影響を与えたことは周知の事柄である。版画芸術の影響は、この一時期にとどまらず、さらに連続して新たな絵画表現の貢献素材となり、ボナールらのナビ派から、女性画家パウラを含む20世紀初頭の表現主義に及んでいる。自然界のインプレッション（印象）を描く印象派のみならず、人間内面のエクスペッション（表現）を表出させた画家たちに少なからぬ造型的喚起力を与えている。ドイツ表現主義の芸術集団「ディ・ブリュッケ（橋）」のマニフェストを描いた版画をはじめ、エゴン・シーレはパウラと同じく、写楽に関心を寄せ、自らの手法に援用している。日本が生み出した造型、普遍性を持つ芸術としての浮世絵が与えた影響は、今後一層の多角的な研究が必要と思われるのである。

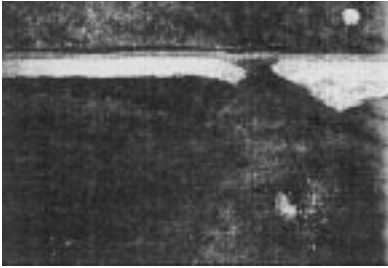


図1-1 パウラ・モダーゾーン=ベッカー《野原の上にかかる月》



図1-2 貞信《備後》
(海岸の月夜風景が造形的影響を与えたと思われる。)



図2-1 パウラ・モダーゾーン=ベッカー
《盲目の姉妹》



図2-2 奥村政信《若い女と少女》
(『林忠正図録』には春信と誤記。ふたりの人物、相合傘など、親密な雰囲気の間構図が、女性画家のその後の題材にも数多くの影響を与えた。)



図3-1 パウラ・モーダーゾーン＝ベッカー
《休んでいる母》



図3-2 喜多川歌麿《赤子を高く抱きあげている母》
(歌麿の母と子像はほとんど「動」の様子を描写しているが、女性画家パウラは対照的に「静」の母子像を追求した。)



図4-1 パウラ・モーダーゾーン＝ベッカー
《母の手と赤ん坊》
(林コレクションをともに見た詩人リルケの買い上げ作品となった。)



図4-2 東洲斎写楽《ふたりの役者絵》
(女性画家は手の表情に注目し、自作に転用した。)

A . 主要参考文献

- 『永井荷風集』(現代日本文学全集第二十二編) 改造社、昭和2年
- 『ドイツ表現主義』全5冊 河出書房新社 1972
- 大島清次『ジャポニスム 印象派と浮世絵の周辺』美術公論社 1980
- サミュエル・ピング編 大島清次他監修『芸術の日本』美術公論社 1981
- 定塚武敏『海をわたる浮世絵 林忠正の生涯』美術公論社 1981
- 木々康子『林忠正とその時代』筑摩書房 1987
- 『秘蔵 浮世絵大観12 ベルリン東洋美術館』講談社 1989
- 『秘蔵 浮世絵大観6 ギメ美術館』講談社 1989
- 明治美術会編『日本近代美術と西洋』中央公論美術出版 1992
- 『リルケ全集』(定塚敏監修 全10巻) 河出書房新社 1994
- 馬淵明子『ジャポニスム 幻想の日本』ブリュッケ 1997
- ジャポニスム学会編『ジャポニスム入門』思文閣 2000
- 高階秀爾『西洋の眼 日本の眼』青土社 2001
- Busch, Günter/Von Reinken, Lieselotte (Hrsg.): Paula Modersohn-Becker in Briefen und Tagebüchern, S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main 1979.
- Pauli, Gustav: Paula Modersohn-Becker, Kurt Wolff Verlag, 2. Aufl., München 1922.
- Hetsch, Rolf (Hrsg.): Paula Modersohn-Becker, Ein Buch der Freundschaft, Rembrandt Verlag, Berlin 1932.
- Busch, Günter: Paula Modersohn-Becker, Malerin Zeichnerin, S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main 1981.
- Von Reinken, Lieselotte: Paula Modersohn-Becker, Rowohlt Taschenbuch Verlag, Reinbek bei Hamburg 1983.
- Busch, Günter/Werner, Wolfgang (Hrsg.): Paula Modersohn-Becker, Werkverzeichnis der Gemälde, 2 Bände, Hirmer Verlag, München 1998.
- ## B . 図録
- “Collection Hayashi Estamps Dessins Livres illustres du Japon” réunis par T. Hayashi (『林忠正旧蔵浮世絵コレクション売立目録』), Paris 1902.
- “Collection Hayashi Objets d'Art et Peintures du la Chine et du Japon” réunis par T. Hayashi (『林忠正旧蔵日本・中国絵画・工芸品コレクション売立目録』), Paris 1903.
- 『ジャポニスム展(19世紀西洋美術への日本の影響)』国立西洋美術館 1988
- 『フランス絵画と浮世絵 東西の架け橋 林忠正の眼 展』読売新聞社 1996
- Paula Modersohn-Becker in Bremen, Paula-Becker-Modersohn-Haus, Bremen 1996.
- Paula Modersohn-Becker 1876-1907 Retrospektive, Lembachhaus, München 1997.
- Rainer Maria Rilke und die bildende Kunst in seiner Zeit, Bremen 1997.